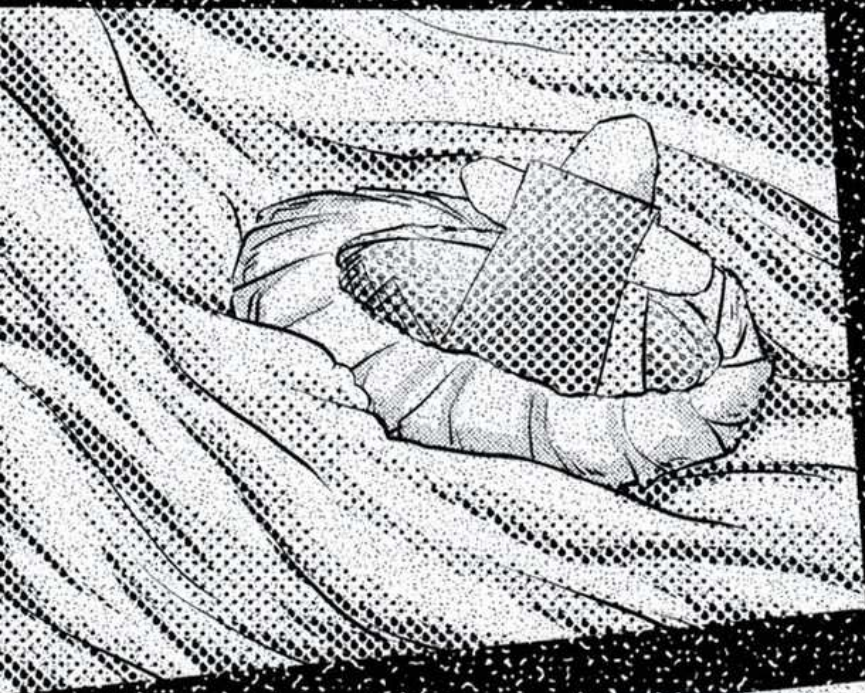




陽はまた必ず昇るから

『 …離 …最期に …君に… 』



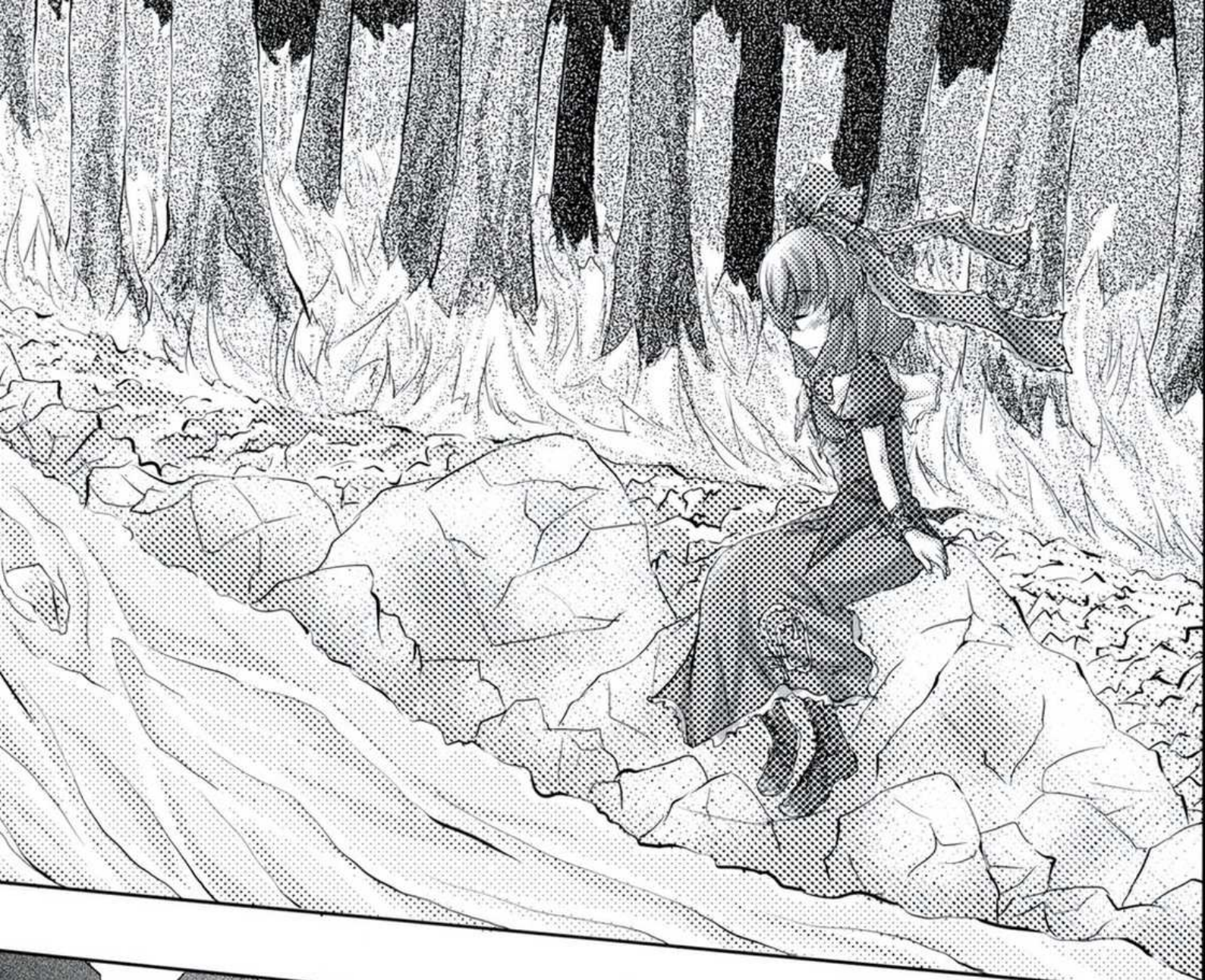
ちやふ



『 …伝え …君に… どうか…… 』



ササ



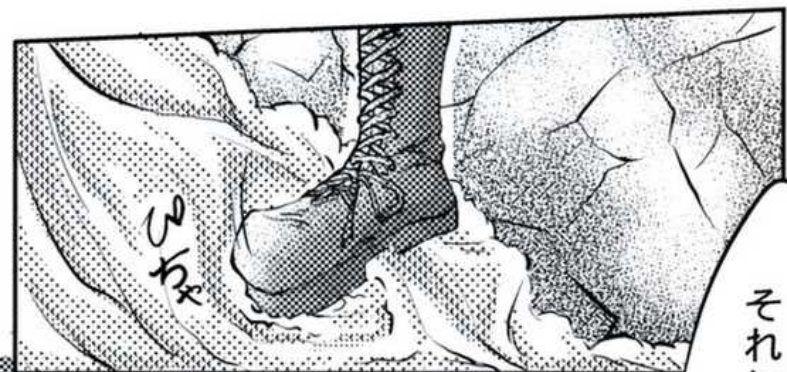
おーっ！

びゅん



なんか流れてくるのか？

トッ



ウわ



桃とかなら食ってやるぜ？

それに、

そんな物拾ったら子育てする羽目になるけど・・・



桃一個の為にそれは割に合わないな



いらん

…厄ならあるけど？



いつも暇そうだな
お前

それにしても



ん、
そうだ!



遠慮しておくわ

.....



なあ、今から神社に
でも行かないか?

それじゃ、
私は本借りにでも
行ってくるぜ

グハッ



ん……そっか

『それじゃ、また明日！』



また会う日を、
望むかの様な言葉――



それはひどく懐かしく

悲しい、記憶の底――



……ええ

……じゃあ、またな

時に流れて消えた遙か昔の...



遠い昔、何度も何度も
その言葉を聞いた



まいったな...
どこだ、ここ...

.....
歌?



忘れ得ぬその日々は、
まるで.....

おっかしいな...こっち...
じゃないな、どう見ても...



こっちの方から
聞こえ.....





あ…



あのっ！
ちよっと、いいか？



そう…

だったら、
今すぐ帰りなさい

ここはヒトの
来る所じゃないわ




あら？

アナタ…人間？




？


あ、ああ…
見ての通り、だが




いやあ、その…
道に迷って…



そう…
わざわざ来たの
わけではないのね




あっちに真っ直ぐ
行くと川に出るわ
その川に沿って
下っていけば人里に
出られるはずよ




いえ…



助かったよ、ありがとう



それじゃあ！



…と、そうだ
忘れてた

鍵山 雛

それが私の名よ

名前は？

私の？

他に誰もいないって

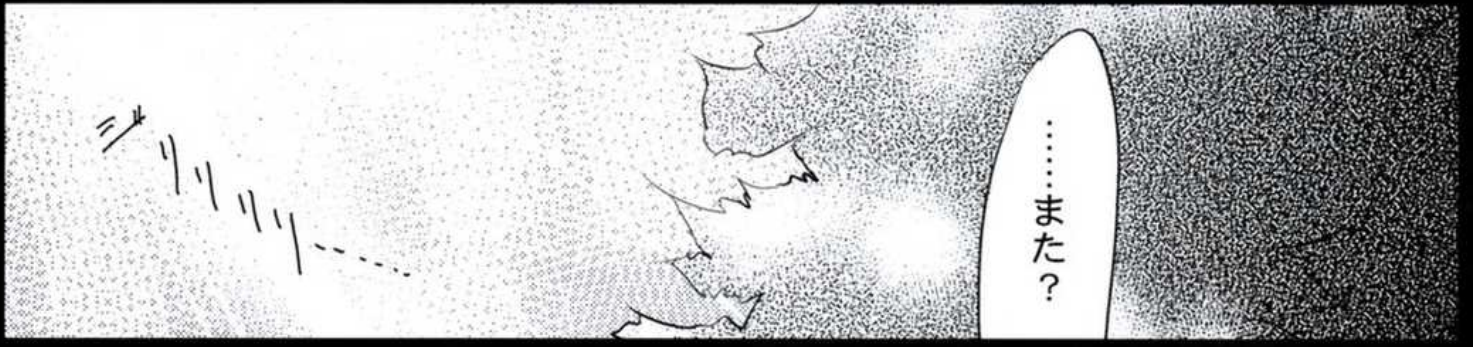
うん、いい名前だ

雛か

『 またな、雛 』

それじゃあ、
今度こそ帰るとするよ

.....
？



……また?



ンウっ……
あつっ……



おはよっ!



ま、まさかまた迷ったわけじゃ……

いやいや……



帰る時道覚えて
おいたんだ

またなって言ったろ？

聞き間違いだと思い
たかったんだけど…

まあいいじゃないか

よくないと云ってる
のだけど…

や、友達になりたくて

……こんな山奥で、
一体何と友達になる
つもりかしら？

わざと云ってる？
雖以外誰もいないだろ

はあ……

厄神と友達になろう
なんて人間初めて見たわ

?

?

?

?

?

……





はあー……

いい加減
わかりなさい

私は不幸の神よ
人から厄を引き受ける
だけど逆に近くにいたら
その厄を受ける事になる
だから来るなって何度も
言ってるのよ



あのさ、今度近くで祭があるんだけど
一緒に行かないか？



まあ、わかっちゃいるけどさ……

つっても何も無い所で
コケるとかって程度だし……
大体元々俺達の厄だし
いいんじゃないか？

それはまだ序の口……
ていうか何気に私の存在
全否定よね、それ……



ああー！

そんな事なら問題ないよ
浴衣持ってくるからそれ着れば
いいだけの話だろ？



それにそもそも
こんな格好じゃ人里の
祭になんて……



バカで構わないさ

俺は他のとでもなく
雛と行きたいんだ



全く…バカなのね

そこまでして私と行く事ないでしょ



寂しいだろ



“私いると不幸になる”
って言うけど

俺にとつては逆だよ
雛といた方が不幸だ
……だってそんなの



雛はさ……



寂しい……

寂しい事が何よりも不幸だ
彼はそう言っていた

どんな怪我や病よりも
それは痛く苦しいのだと

私には、ソレは

わからなかった

暗く深い森の奥で、ずっと

一時の例外さえなく私は独りだった

だから
寂しいという思いすら

私は知らなかった――



…みたいね



よー！
また来たぜ

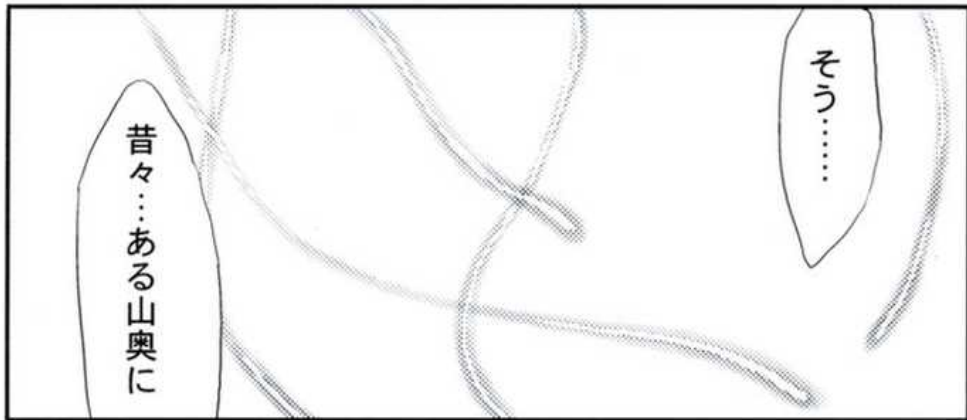


ほれっ



ああ、そうそう



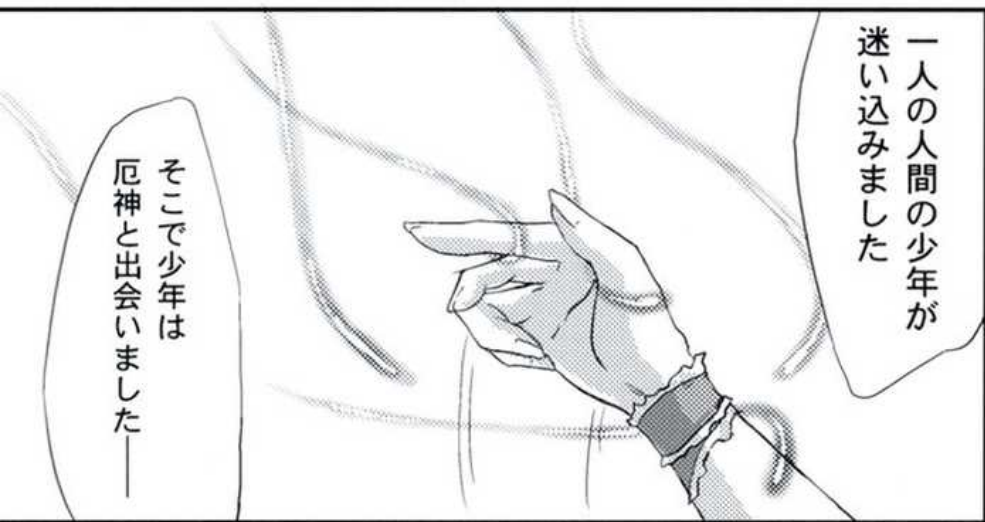


そう……

昔々…ある山奥に



まるで——
御伽噺よね…



一人の人間の少年が
迷い込みました

そこで少年は
厄神と出会いました——



やがて

二人は親しくなり——

ち、ちよつと…
まっ…歩きつら…
そんな急がなくてもっ



厄神の言う事も聞かず
彼は毎日の様に
彼女を訪ねました

ほら！
あっち行ってみよう



——厄神は、温もりを知りました



それは温かな日々だった
甘やかな時間だった



孤独すら知らなかった私が



いつの間にか、そんな楽しい
日々を当り前に感じていた





ありがとう、雛

私も…楽しかったわ



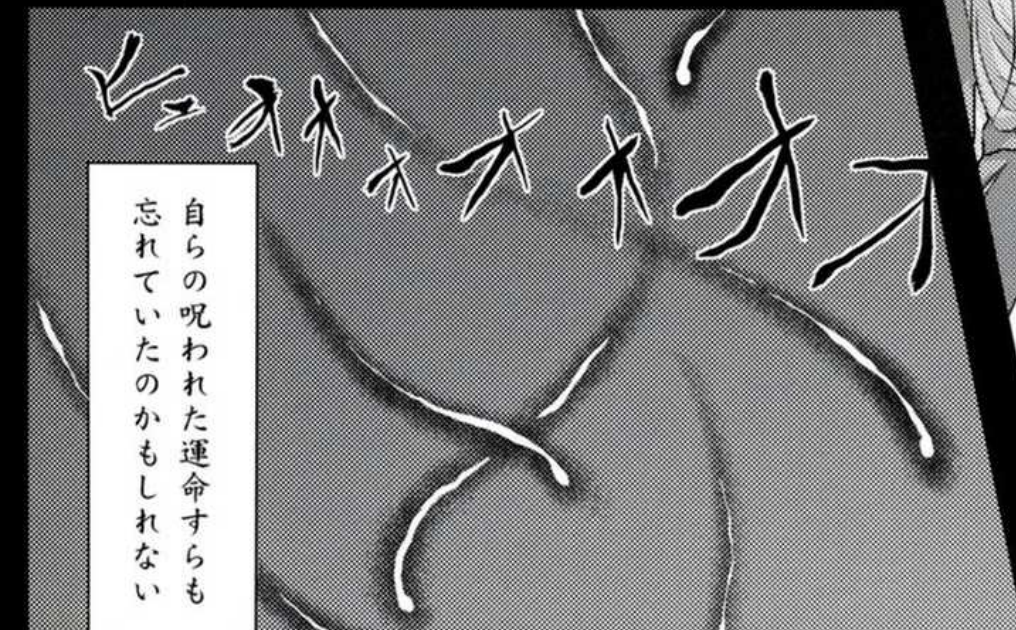
はあー
こんなに祭を楽しんだのは
久しぶりだよ



そんな日々に溺れて
知らぬ間に私は――



…ありがとう



自らの呪われた運命すらも
忘れていたのかもしれない



大丈夫？

ん、だいじ…

アホッ！！
イホッ！！



ずっとそんな日々が続いていくと
当り前の様に思っていたかもしれない
そんなある日――



すごい熱じゃない！



ああ…そうするよ

それからしばらくの間――



全く…今日はもう帰って
ゆっくり休みなさいな
こじらせたなら大変だわ



どれくらいの間だったか…
彼はしばらくの間姿を見せなかった
それまで毎日の様にいたのが嘘の様に



そうであったのなら……
余程……楽だったのに……



それなら、それは正しい事
あるべき形 望むまでもなく
かくあるべき運命……
だから、そうだったらよかった



本当にこじらせでもした
のだろうか……

それとも、もしかしたら
厄神というものを、やっと……

不幸になるという事を
理解し忌避してくれたのか



ーッ!!



久し…



久しぶり、雛

彼は、また来たのだった



全然…そんなの……
出歩いてていいわけ
ないわよね？



……。
どうしても……もう一度
会って、話が……伝えたい事が……



…何……何を…してるの？

駄目だ…わかってしまう

帰って…
寝てなさいよ

……どうしても
今、伝えたいんだ

もう、何もかもが……遅いのだと

それでも……

……ごめん
辛い思いさせるだけなのは
わかってる……でも

でももう、今言わなくちゃ……
次は、ないかもしれないんだ

それでも、否定したかった

そんなの!!!
今度いくらでも聞くわ!!
だから…治してきなさいよ!!!



…君の事が

好きなんだ…

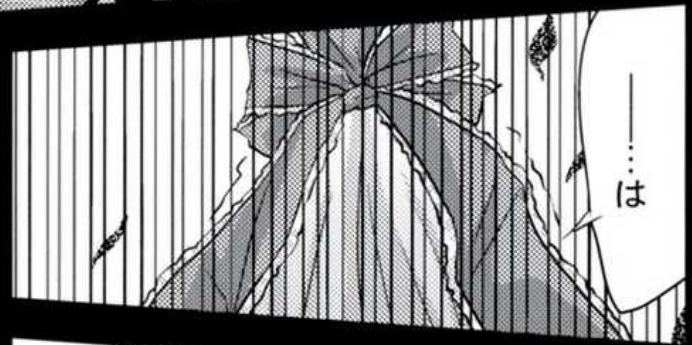


雛……俺は…



わかってる……わかってるんだ……
それでも俺は——雛が好きなんだ

それが、君を傷付ける事も……
でも、だからこそ、伝えたかった



……は



私はっ……厄神なのよ……？

人ではないし……
人の厄を、被いはするけれど——
でも、私の側にいたら不幸に……
今貴方が病を患ってるの
だって、もしかしたら……





嗚呼—— 違えたのはどちらか

私か、彼か—— 神か人か……
ただ、私もまだ、全然わかってなんていなかった

クワッ...

忌まれるその理由

失う悲しみ—— 絶望

何より守るべきヒトの——

弱さ……そして強さも

サマ...

人間よ……弱く儂い者等よ——
その弱き身も……強き心も——

いづれ果てる運命でも

それでも不幸に弄ばれぬ様に……
少しでも苦しくない様に——
少しでも哀しくない様に——

今度こそ、その不幸の種は

全て私が



ふ…?

符



望んだの……

私がそう



だから私は
もう一人でいいの

恋符「マスタースパーク」



なアツ!!?

ビクビク



いっ……いきなり何するのよ!!

殺す気か……

ちやっぴん



そんなの!
何もよくないぜ!!!



……わかんねえな
何がそれでいい、なんだよ



だったら、そんな顔するなよ!!
そんな何か諦めたみたいな顔で—
そんな虚しい笑顔で語るな!!
何が御伽噺だ……
そんな悲しいだけの話を
お前が一人ぼっちになっただけの話を
私は語り継ぐ気になんてなれないぜ!!!



私は——この運命を

違う……!! そんな事ないっ!!
……何より強くて……何より綺麗で……
わかってるのよ……そんな事
——それでも……それだからこそ

“お前といられない方が
よっぽど不幸だ”って
言われたんだろうが!!!


……お前がその人間と出会って
得たものはそんなもんだったのか?

お前に心を教えてくれた人間が——


最後に命を懸けてまで——
どうしてもお前に伝えたかった事

それは無駄だったのか?
愚かな下らない願いだったのか?





弾幕は火力、だぜ
どうだった、この威力




一緒にいたい……
笑顔で居て欲しい……
そいつのためなら
自分が不幸になったっていい
——そいつを泣かす全てを
綺麗さっぱりなくしてやる
そんな……
何よりも、強い想い——

それが——



恋の魔法、だぜ




嗚呼……




私は知ってる……

その陽射しにも負けない
眩しい笑顔を――

失いたくなかった
大切なもの



笑顔に重なるその思い出が……
知ってしまった寂しさが――



誓いさえも揺らいでしまう……
彼の最期の言葉に、目の前の笑顔に――

それを罪だと知っているのに



この手を取らずにはいれないのだろう

どうしてこんなに温かいのだろう——





とりあえず霊夢に
茶でも出して貰うか



ううっ……

さすがにもう
濡れると寒いぜ



断ったら引きずって
連れてかれそうだし……
大人しくついていくわ



……そうね



ハハっ
よくわかってんな

罪なのだろう
過ちなのだろう

ほら！
早く後ろ乗れって

ど、どう乗るの
これっ

それでも、この眩しい笑顔を
また出会ったこの光を――



ちよ、ちよん!!
速攻!! 落ちる!!

ちよんちよん!!
木々米々!!

速攻!!

.....
愛おしく、思う

神様といっても日本のそれやギリシャの方だとかのそれってかなり人間くさいですよー
やるなよ！絶対にだ。絶対にだぞ！！というのも前振りの如しな感じで。

はじめましてこんにちは。天乃ちはるです。
ここまで読んで頂いてありがとうございます。

そんなわけで東方本一発目、雑のお話でした。
この話はこれで終わりですが、何やらプロローグ感すら漂ってる気が……
ま、まあアレです。実際現実だって物語みたいにハイ、オシマイじゃないわけですから。
ひとつの物語の終わりはまたひとつの始まりだという事で。

……まあ自分で描いておいてなんですが、幻想郷に住む面々なら厄くらいどうにでも出来てしまいそうだな……
なんて描きながらずっと思っていたり。特にどこぞのおぜうさまとか。
なんともぶち壊しな発言な気もしますが。

さて今回は地霊殿の人たちあたりのお話ですかねー

俺:次の構想大体決まってるんだ。こいしちゃんあたりで霊夢好き好きとか。

友人:ほう、具体的には？

俺:うん。それだけ。

友人:何も決まってないのと一緒だろうが！！

なんていう怪しい会話をした気がしないでもないですが気のせいって事にしておきます。

それでは、また気が向いたらどうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。

サークル GAULOISES BluE

タイトル 陽はまた必ず昇るから

描いた人 天乃ちはる

発行日 2008/10/05

URL <http://gblue.seesaa.net/>

印刷 ねこのしっぽ様



2008
GAULOISES Blue
Touhou Project Fanbook